

核データセンタ実現への道

西村和明(原研)

長年の懸案である核データセンタが46年度から発足するはずであり、センタ発足にともなって編集子から巻頭言を準備する限りと言われていた。しかし期待に反して現実には厳しく、今年も見送りとなってしまった。センタ設立の要望書をお願いした所外の方々、また不断の御協力を得ているシグマ研究委員の方々からみれば、原研は一体何をしているのだと腑甲斐なく思われるであろう。核データに関する情報は、すでに個々の研究者の努力では手に負えない程膨大かつ多様になり、原子力の研究、開発における核データの重要性、核データセンタの必要性が漸く認識されつつある。このような現在、核データセンタが発足するしないにかかわらず、公共的性格をもつ原研としては核データの利用に対する国内の強い要望に是非とも答えていかなければならない。

核データセンタの核として現在核データ研究室が実施している研究業務には、核データの収集、利用；核データの評価；および情報交換がある。これらに関連するサービス業務のうち、とくに数値データ(測定および評価済み核データ)に対する要望のみを集約してみると、

- 1) 核データの入手
- 2) 入手した核データの格納システムの整備およびデータファイルの up dating
- 3) 入手した核データのプロットおよび保管
- 4) 核データの入手状況およびプロット状況の定期的なアナウンス
- 5) 関連するプログラムの整備

が、その主なものである。このような要望をみたすためにはどのような組織が必要であろうか。

測定された核データをもとに評価作業を行なって評価済み核データファイルを作り、これを炉物理的に処理して炉定数セットにし、さらに積分実験、炉設計計算に適用するという一連の核データの流れを考えてみる。この流れをシステムとしてとらえた場合、核データ専門部会では核データの格納、検索システムの整備および評価作業を核データ研究室が中心となって行ない、また炉定数専門部会では炉定数の整備を行なっている。したがってこの両者の間の作業を有効かつ円滑につなげるためのシステム開発が、現在もっとも急がれている部分である。換言すれば、評価済み核データを処理して評価済み核データファイルに格納するデータのプロセスシステムである。

原研内の関連する各研究室が協力してこのようなシステムを作りあげれば、測定データを入手して評価を行ない、素性のわかった評価済み核データファイルが作られると共に、既存の諸外国の評価済み核データファイルをも活用して、日本個有の評価済み核データファイルが作成、整備されていくであろう。このようなシステムの効率的な運用にともなって、上記の数値データに対する国内

の要望もみたされ、原研全体として見た場合実質的なデータセンタの芽が伸びて行くであろう。

将来これら一連のシステムの運用を総括するところが核データセンタであり、核データの格納、検索、評価、ファイル作成の諸作業の計画立案、進行状況の監視、作業成果のまとめがその機能として最小限要求されるであろう。

このようなセンタ構想に従ってとりあえず46年度は原研の所内体制を強化し、核データ研究室の機能を充実、拡大して核データに対する要望と期待に対処していきたいと念願している。